

作況ニュース（第2号）

水 稲
大 豆

（発行：令和8年5月29日）（編集：令和8年5月26日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

高温を踏まえた水管理の徹底と初期生育の確保を

- － 高温による異常還元に注意 －
- － 除草剤は適期を逃さずに散布 －

1 今後の気象の見通し

(1) 東北地方3か月予報（6～8月） 【令和8年5月19日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう3か月の天候>

向こう3か月の平均気温は、高い確率60%です。

6月 期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

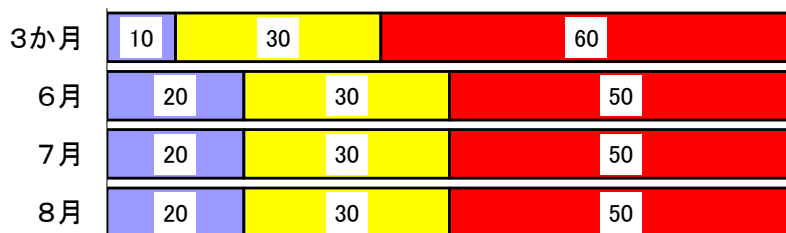
7月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

8月 東北日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

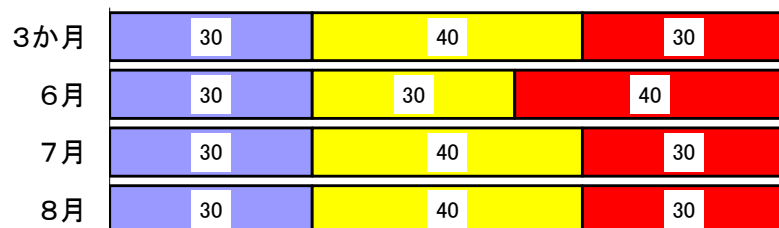
【気 温】

[東北地方]



【降水量】

[東北地方]



□低い(少ない) □平年並 ■高い(多い)

(2) 東北地方1か月予報（5月30日～6月29日）【令和8年5月28日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう1か月の天候>

期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率が50%です。

週別の気温は、1週目（5月30日～6月5日）は、平年より高い確率80%です。2週目（6月6日～6月12日）は、平年並の確率50%です。3～4週目（6月13日～6月26日）は、平年並か高い確率40%です。

- 次回の予報発表予定： 1か月予報 毎週木曜日14時30分
3か月予報 6月23日(火) 14時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

(1) 苗の生育

農試気象感応試験における苗の生育は、4月3日と4月10日に播種し、35日間育苗した中苗では、草丈は平年よりやや短かったが、葉数は平年並、乾物重および充実度は平年並～上回った。また、4月20日播種の35日間育苗の中苗では、葉数は3.8葉、草丈は15.4cmで平年をやや上回り、乾物重、充実度は平年を上回った。

本年の育苗期間中の気温は、4月4半旬まで最高気温が平年より高く、また5月3半旬以降も平年を大きく上回る経過で、苗の生育は平年並～やや早かった。一方、4月後半の多照期間と、無加温出芽における被覆期間が重なった育苗施設では、育苗箱内温度が上昇し苗ヤケを生じた事例があった。5月2半旬以降も日照時間はかなり多く、苗の葉数は進んだ。

(2) 活着の状況

移植翌日から5日間毎の平均気温の推移（移動平均気温）は、概ね5月10日以降では全県で14℃を超え、その後さらに上回って経過した。5月22日、24日の低温により平年並～やや低くなったものの、一時的な低下であり、移植苗の活着は順調と推定される。

5月15日に農業試験場内水田へ移植したせん根苗を移植10日後に調査した結果、発根数は平年より少なかったが、発根長と発根乾物重は平年を上回った。移植後10日間の平均気温は平年を0.5℃上回り、苗の活着は良好だった。

(3) 病害虫の発生概況

1) 苗の病害

5月2～3半旬に育苗期巡回調査（全県86地点）を行った結果、種子伝染性病害では、ばか苗病の発病箱率は2.6%（平成1.5%）でやや高く、発病地点率は22.1%（平成9.3%）で高かった。また、もみ枯細菌病の発病箱率は0.3%（平成0.5%）で平成並、発病地点率は4.7%（平成2.8%）でやや高かった。

土壌伝染性病害では、フザリウム菌、リゾープス菌の発病箱率、発病地点率がやや高い～高かった。ピシウム菌、トリコデルマ菌の発病地点率、発病箱率はやや低い～平成並だった。

2) 害虫

・イネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）

5月4半旬に実施した水稲における沿岸部（19地点）のイネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）の巡回調査では、52.6%の地点で産卵が確認され、要防除水準（株当たり卵数が1.5個又は産卵株率が50%）を超えるほ場が1地点確認された他、同水準に近いほ場が3地点あった。株当たり卵数は平均0.29個で、過去に注意報を発表した3か年（2013～2015年）の平均（0.97個）より少ないが、2016～2025年の平均（0.15個）と比較して多かった。同様に産卵株率は平均9.3%で、注意報を発表した3か年の平均（27.4%）より低い、2016～2025年の平均（5.5%）と比較して高かった。

詳細については、令和8年5月21日に発表した令和8年度農作物病害虫防除対策情報第3号（以下、対策情報3号）を参照。（<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/genre/bojo>）

・斑点米カメムシ類

牧草地すくい取り調査における斑点米カメムシ類の越冬世代幼虫の発生時期は、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメともに早かった。

・フタオビコヤガ（イネアオムシ）

育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における育苗施設内の成虫数は0頭（平成0.1頭）でやや少ない、卵確認地点率は0%（平成2.7%）でやや低かった。

*病害虫の発生状況等の詳細については、令和8年5月26日に発表した令和8年度農作物病害虫発生予察情報 発生予報第2号（以下、発生予報第2号）を参照。（<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/genre/bojo>）

3 当面の技術対策（6月上旬～中旬）

本年の育苗期間は高温で経過し、苗の生育は概ね順調だったが、病害の発生はやや多かった。また日照時間もかなり多く、無加温出芽における被覆期間中に育苗箱内温度を高温に管理した育苗施設では、苗ヤケが散見された。

5月中旬は高温で降雨もなく、移植作業は順調に進み、苗の活着は良好と推定される。今後は初期生育の確保に努めるが、高温により藻類や表層はく離の発生が早まっていることから、初期生育の確保と同時に土壌の異常還元防止に努める。除草剤散布による湛水期間の兼ね合いを見ながら、ほ場の状況に応じて田面水の交換や短期落水など、異常還元の軽減対策を講じ、有効茎数を早期確保するための栽培管理を徹底する。

（1）分けつ発生促進の水管理

中苗あきたこまちの場合、高品質・良食味米の安定生産には、強勢茎である第3節から第6節の1次分けつを主体に確保することが重要である。5.1～6.0葉期に第3節の分けつが発生するため、活着後の水管理を徹底して分けつを確保する。

活着後の水管理は、最高気温が15℃未満の場合には深水管理を行い、15℃以上の場合には浅水管理を行い、水温と地温を高める管理を行う。

還元しやすい土壌では、ほ場に足を踏み入れるなど、還元（ワキ）の程度を確認し、異常還元や表層はく離が見られた場合には、速やかに短期間の落水や水の入れ替えにより異常還元を防止し、根圏環境の改善を図る。

分けつの発生は、昼夜の水温較差が大きい場合に促進されるため、かんがいは水温の低い早朝に短時間で終了し、日中は止水管理を行う。かんがいの水温が低い地帯では、温水田や迂回水路、ポリチューブなどを用いて水温の上昇に努める。また、畦畔や水尻等からの漏水防止対策による止水管理を確実に実施する。（令和8年3月発行稲作指導指針（以下、「稲作指導指針」という）p.73～74参照）

（2）除草剤の適正使用

除草剤の使用にあたっては、雑草の種類と量に応じた適切な薬剤を選択する。雑草の発生状況を観察して散布時期が遅れないよう使用する。これから除草剤を散布するほ場においては、土壌還元の程度を確認し、必要に応じて水交換や短期間の落水を行ってから除草剤を散布する。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は止水管理を行い、落水、かけ流しはしない。薬害のおそれがあるので、除草剤散布後は補植をしない。（稲作指導指針p.96～100、令和8年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準（以下、「防除基準」という）p.318～330参照）

（3）余り苗は直ちに処分

余り苗はいもち病が発病しやすく周辺ほ場への伝染源となるので、直ちに泥に埋めて処分する。

（4）葉いもち防除剤の適期散布

葉いもち防除として、育苗箱施用剤や側条施用剤を使用しなかった場合は、6月15日頃（6月12～18日）にオリゼメート粒剤を10a当たり2kg散布する。同粒剤は湛水

状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。(防除基準p.24～27を参照)

(5) 藻類・表層はく離の防除

アオミドロ等藻類や表層はく離の発生が多くなると地温や水温が低下し、生育を抑制するので適切な対策を講ずる。

アオミドロ等藻類や表層はく離の発生が多いほ場では、気温の低い早朝や雨の日に水の入替えを行う。水管理だけで十分な効果が見られない場合は、中耕機によるかくはんやACN剤等を散布する。

(6) 初期害虫は防除の要否を判定して適期の防除を実施

イネヒメハモグリバエの産卵数はほ場間差が大きいので、ほ場をよく観察して発生状況の把握に努める。平均気温が15℃の場合、卵は7日前後でふ化するので、産卵数が要防除水準を超えるほ場では、幼虫による食害が見え始めたら茎葉散布剤や水面施用剤で防除する。散布後7日間は落水、かけ流しはしない。ただし、本種に有効な育苗箱施用剤を使用している場合は、あらためて防除する必要はない。詳細については、対策情報第3号を参照する。

イネミズゾウムシは、6月上旬に越冬後成虫が株当たり0.3頭以上(食害株率90%以上に相当)になった場合に、水面施用剤で防除する。

イネドロオイムシは、産卵盛期(6月上～中旬)に株当たり卵塊数が0.5個を超えた場合、ふ化盛期(6月中旬)に茎葉散布剤で防除する。

フタオビコヤガ(イネアオムシ)は、幼虫の食害が多い場合、6月上旬に茎葉散布剤で防除する。

(7) 斑点米カメムシ類の繁殖を抑える雑草管理

主要な加害種であるアカスジカスミカメは、ホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し増殖する。そのため、水田内でこれらの雑草が繁茂すると水田内へのアカスジカスミカメの侵入が助長され、斑点米多発の原因となる。これを防ぐため、水田除草剤を適切に使用して水田内のカヤツリグサ科雑草やノビエの防除を確実にを行い、水田内へのアカスジカスミカメの侵入を防ぐ。また、農道や畦畔、休耕田、雑草地等の草刈りを6月上旬からイネが出穂する15～10日前までに数回実施する。

(8) 直播栽培の当面の技術管理(カルパー土中播種の場合)

1) 出芽後の水管理の徹底

落水管理終了後は、出芽揃いまで浅水管理(3～5cm)を行う。出芽揃い後は気温と生育に合わせて水深を調節する。

湛水条件で出芽・苗立を行った場合、播種深が浅いほど転び苗が多くなるので、芽干しを行う。ただし、芽干しはその前に散布した除草剤の効果を著しく低下させるので、2～4葉期の間に除草剤の使用を考慮した上で3～7日間程度の芽干しを行う。

藻類・表層はく離の発生が見られる場合や、土壌の異常還元が起きた場合は、短期間の落水や水の入替えにより対応する。

2) 除草剤の適期散布

本年は播種後の気温が平年より高く推移しており、ノビエ等の雑草の発生もかなり

早まっているため、直播栽培に登録のある除草剤を適期に散布する。除草剤の散布適期を逸した場合や、日減水深の大きいほ場、均平の悪いほ場、苗立数が著しく少ないほ場では、特に残草や後発雑草への注意が必要である。残草がある場合は、草種に応じた中期剤を選択する。(稲作指導指針p. 115～116、防除基準p. 331～335、342参照)

3) 目標苗立数からみた対応技術の徹底

本年は播種後(5月中旬以降)の気温がかなり高く、降雨もなかったため、落水出芽により、出芽状況は良好と見込まれる。しかし、苗立数が多く、過繁茂が懸念される場合は、有効茎を確保後に速やかに中干しに入れるよう溝切りを実施する。一方、苗立ち数が60本/m²以下の場合は2～4葉期に追肥(N-2 kg/10a以下)を行い、分けつの発生促進に努める。

4) 初期害虫の防除

直播栽培では、イネミズゾウムシやイネヒメハモグリバエ(イネミギワバエ)等の初期害虫による食害が移植栽培より大きくなる。害虫の発生状況をよく観察し、防除を実施する。

【時期別・主要作業別指導事項】

(移植栽培)

月 旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
6 月 上 旬 ～ 6 月 中 旬	水管理	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活着後は分けつの発生が促進されるように浅水管理を行う。 ○ かんがいは水温の最も低い早朝に行う。 ○ 異常還元（ワキ）時は短期間の落水や田面水の入替えを行う。 ○ 山間高冷地や冷水かんがい地帯では、ポリチューブ等により水温上昇に努める。
	除草剤の散布	<ul style="list-style-type: none"> ○ 葉害のおそれがあるので、除草剤散布後は補植をしない。 ○ 雑草の発生状況を観察し、除草剤を適期に散布する。 ○ 散布にあたっては、使用方法と使用上の注意事項を遵守する。
	余り苗の処分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 余り苗は放置するといもち病の伝染源となるので、直ちに泥に埋めて処分する。
	いもち病の 防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 育苗箱施用剤や側条施用剤を使用しなかった場合は、6月15日頃（6月12～18日）にオリゼメート粒剤を10a当たり2kg散布する。
	藻類・表層はく離の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 気温の低い早朝や雨の日に水の入替えを行う。 ○ 多発した場合は、中耕機によるかくはんやACN剤等を散布する。
	初期害虫の 防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ イネヒメハモグリバエは株当たり卵数が1.5個又は産卵株率が50%を超えるほ場では、幼虫による食害が見え始めたら茎葉散布剤や水面施用剤で防除する。イネミズゾウムシは6月上旬に越冬後成虫が株当たり0.3頭以上（食害株率90%以上に相当）、イネドロオイムシは6月上旬～中旬に株当たり卵塊数が0.5個を超えたら防除する。
	斑点米 カメムシ類 対策	<ul style="list-style-type: none"> ○ カヤツリグサ科雑草やノビエの防除を確実にし、水田内へのアカスジカスミカメの侵入を防ぐ。 ○ 畦畔等の雑草管理は、地域でまとまって行う。
農薬飛散・ 流出防止対策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農薬散布を行う場合には、飛散防止対策の一層の徹底を図る。水面施用剤散布後7日間は落水、かけ流しはしない。 	

(直播栽培)

月 旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
6 月 上 旬 ～ 6 月 中 旬	水管理	<ul style="list-style-type: none"> ○ 出芽揃いまでは浅水管理（3～5cm）を行う。 ○ 湛水条件で出芽・苗立を行った場合は、2～4葉期の間に除草剤の使用を考慮した上で3～7日間程度の芽干しを行う。
	除草剤の 適期散布	<ul style="list-style-type: none"> ○ 直播栽培に登録のある除草剤を適期に散布する。 ○ 残草が見られる場合は、イネおよび雑草の葉齢を確認し適期中期剤を散布する。
	目標苗立数の 確保	<ul style="list-style-type: none"> ○ 苗立ち数が60本/m²以下の場合は2～4葉期に追肥（N-2kg/10a以下）を行う。 ○ 過繁茂が懸念される場合は、有効茎を確保後に速やかに中干しに入れるよう溝切り等を実施する。
	藻類・表層はく離の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 気温の低い早朝や雨の日に水の入替えを行う。
	初期害虫の 防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ イネミズゾウムシやイネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）による被害は移植栽培よりも大きくなるので適切に防除する。
	斑点米カメムシ類対策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 移植栽培に準ずる。
農薬飛散・ 流出防止対策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 移植栽培に準ずる。 	

大豆

砕土率の確保による出芽・苗立ちの安定化

- 排水対策により土壌水分条件を好適に —
- 播種時期に合わせた適正な播種量の確保 —

1 当面の技術対策

(1) 排水状況の確認と対策の徹底

大豆は湿害に弱く、特に発芽から生育初期にかけての湿害はその後の生育に大きく影響する。このため、明きよに加え、排水不良ほ場では補助暗きよ等を施工し、排水対策を徹底する。

- 1) 前年に施工した明きよ、補助暗きよは管理作業等により崩壊していることが多いため、必要に応じて再施工または補修を行う。
- 2) 明きよは、ほ場周囲に深さ15～25cm程度で施工し、滞水しないように勾配をつけ、排水口へ繋ぐ。
- 3) 補助暗きよ（弾丸暗きよ、モミガラ補助暗きよ）は本暗きよに直交させて深さ30cm程度、間隔は3～5m以内で施工する。

(2) 種子予措

- 1) 紫斑病の種子消毒にはクルーザーMAXXを使用する。また、クルーザーMAXXは、鳥害（ハト、キジバト）に対する忌避効果があるほか、生育初期の病害（茎疫病、黒根腐病）や虫害（タネバエ、ネキリムシ類、フタスジヒメハムシ等）の同時防除が可能である。
- 2) クルーザーFS30とキヒゲンR-2フロアブルを併用する場合は、薬剤の付着性を考慮し、クルーザーFS30を塗抹した後にキヒゲンR-2フロアブルを塗抹する。（表-1、防除基準p.52～56, 311）
- 3) 大豆初作地では根粒菌接種の効果があるので、上記薬剤を処理後、市販の根粒菌を種子によく付着するように粉衣する。
- 4) 種子への薬剤処理は、播種直前に実施する。
- 5) 大豆種子の発芽能力は高温多湿条件で低下しやすいことから、種子は温度が低く、直射日光が当たらない場所に保管する。

表-1 種子粉衣・塗抹剤の対象病虫害等

対象病虫害等	薬剤名	クルーザーMAXX	クルーザーFS30	キヒゲンR-2フロアブル	キヒゲン
紫斑病、茎疫病、黒根腐病		○			
タネバエ ネキリムシ類 フタスジヒメハムシ アブラムシ類		○	○		
ハト		○		○	○
キジバト		○			

(3) 好適土壌水分条件での耕起・播種作業

- 1) 好適土壌水分条件では耕起・播種作業の効率がよいことに加え、碎土率が高まることなどにより大豆の発芽、苗立ち、初期生育が良好となる。また、碎土率が高いと播種後の土壌処理除草剤の効果が安定し、雑草の抑制にも効果的である。
- 2) 耕起や播種作業は前後の天候を考慮し、土壌の水分条件が良好な日を選び、土壌水分が高い時の無理な作業は避ける。
- 3) 土壌が過湿の場合、種子周囲の酸素不足や急激な水分吸収により種子が崩壊するなど、発芽不良の原因となるので注意する。
- 4) 播種深度は3～4 cmが適当であるが、土壌が乾燥し降雨が期待できない時は、やや深めに播いて鎮圧する。

(4) リュウホウの播種期と収量及び品質

リュウホウは、播種時期が遅いほど「ちりめんじわ」の発生や変質粒等の被害粒が少ない。しかし、播種時期が遅いと生育量不足や梅雨に伴う湿害のリスクが高まることから、作付規模に応じて播種時期や播種量を6月下旬までの期間で計画する。

(大豆指導指針p. 32～33参照)

(5) 播種時期に合わせた適正な播種量

- 1) 大豆の生育量は、播種時期の遅れに伴い小さくなり収量が低下するため、播種時期の遅れに応じて畦間、株間を狭めるなどして播種量を増やし、収量を確保する。(表-2)

表-2 リュウホウの播種時期別の播種量等の目安

播種時期	播種粒数 (粒/10a)	播種量 (kg/10a)	畦間 (cm)	株間 (cm)	1株播種粒数 (粒)
5月下旬 ～6月上旬	13,300～16,800	4.0～5.0	75	16～20	2
			70	17～21	2
6月中旬	17,800～22,200	5.3～6.6	75	12～15	2
			70	13～16	2
6月下旬	25,000～33,300	7.5～10	65	14～17	2
			75	10	2
			70	10～12	2
			65	10～12	2

* 播種量は百粒重を30gとして算出。

(6) 除草剤の適正使用

播種後の気温が高く経過した場合、大豆の出芽や雑草の発生が早まるため、土壌処理除草剤は播種後すみやかに散布する。

- 1) ほ場に発生する雑草種（イネ科主体・広葉主体・両方混在）を考慮し、対象雑草に合った土壌処理除草剤を選択する。(表-3)
- 2) 土壌処理除草剤は、雑草が発生する前に散布する。
- 3) 5月下旬から6月末までの播種は、出芽まで概ね7～10日程度を要する。出芽直前の土壌処理除草剤の散布は薬害が懸念されるため、播種直後から出芽前（播種後5日以内が目安）に散布する。

* 使用時期が「播種直後」の除草剤もあるため、使用時期に注意する。

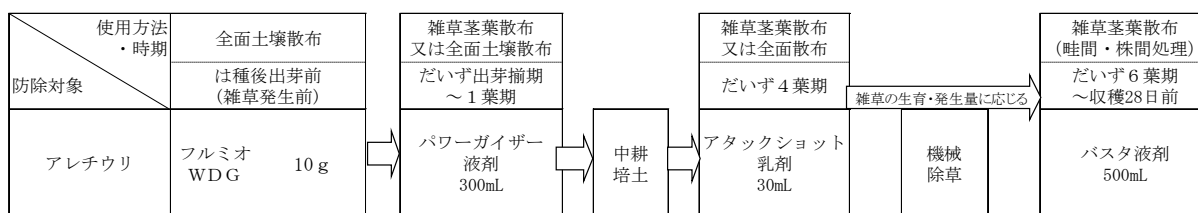
- 4) 除草剤は、薬剤の特性を十分に把握し、使用基準を遵守する。

表－3 大豆土壌処理除草剤の選択性及び使用量(防除基準p.348～351, 353参照)

薬剤名	優占して発生する雑草		10a当たり使用量	
	イネ科雑草	広葉雑草	薬量	水量(%)
ラクサー乳剤	●	●	500～600mL	100
エコトップP乳剤	●	●	500～600mL	100
プロールプラス乳剤	●	●	500mL	100
クリアターン細粒剤F	●	●	4～5kg	-
サターンバアロ粒剤	●	●	5～6kg	-
ラッソー乳剤	●		400mL	100
トレファノサイド乳剤	●		200～300mL	100
トレファノサイド粒剤2.5	●		4～5kg	-
ロロックス粒剤		●	5～6kg	-
ロロックス		●	150g	70～150

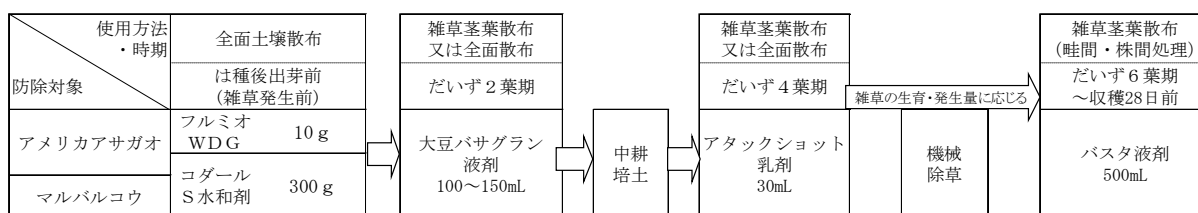
(7) 難防除帰化雑草対策

- 1) 本県において、アレチウリ、アメリカアサガオ、マルバルコウなどのつる性難防除帰化雑草が侵入した大豆ほ場が確認されている。これらの雑草は、土壌処理除草剤だけで防除することが難しく、体系防除が必要となる。(図－1、図－2、資料編p.20、防除基準p.348～357参照)
- 2) 疑わしい雑草を見つけた場合は関係機関へ相談するなど初期対応を徹底する。



注) 図中の薬剤量は10a 当たりの使用量。

図－1 難防除帰化雑草（アレチウリ）の体系防除法



注) 図中の薬剤量は10a 当たりの使用量。

図－2 難防除帰化雑草（アメリカアサガオ、マルバルコウ）の体系防除法

- * フルミオWDGは、使用後に著しい降雨があると薬害を生じるおそれがある。また、微量でも他作物に影響を与えるおそれがあるため、散布に用いた器具類のタンクやホース、ノズルは「フルミオWDG洗剤」を用いて洗浄する。
- * コダールS水和剤は、水稲に薬害を生じるおそれがあるため、コダールS水和剤を使用したほ場では、翌年の水稲栽培を避ける。
- * パワーガイザー液剤は、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後3日間の平均気温が16℃を下回ると予想される場合、処理後に連続した降雨が予想される場合は、強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。
- * アタックショット乳剤は、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後3日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合、処理後に連続した降雨が予想される場合は、強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。

(8) 中耕・培土

中耕・培土は雑草防除、倒伏防止、湿害回避等の効果があり、大豆の生育向上を図るうえで重要な作業であることから、ほ場が過湿となりやすい梅雨期であっても図-3に示したように適期に実施する必要がある。

- 1) 中耕は、初生葉展開期～本葉1葉期頃、子葉が隠れない程度に株元にしっかり土を飛ばすように行い、株元からの雑草の発生を抑制する。ただし、中耕を行うと播種直後に処理した除草剤の効果がなくなることから、雑草の発生がみられない場合は中耕を省略してもよい。(図-3①)
- 2) 1回目の培土は、本葉2～3葉期頃に初生葉が隠れない程度に行う。2回目の培土は、本葉6～7葉期頃に本葉1葉の節が隠れない程度に行う。また、培土は、株元までしっかりと土が盛られるようにする。(図-3②、図-3③)

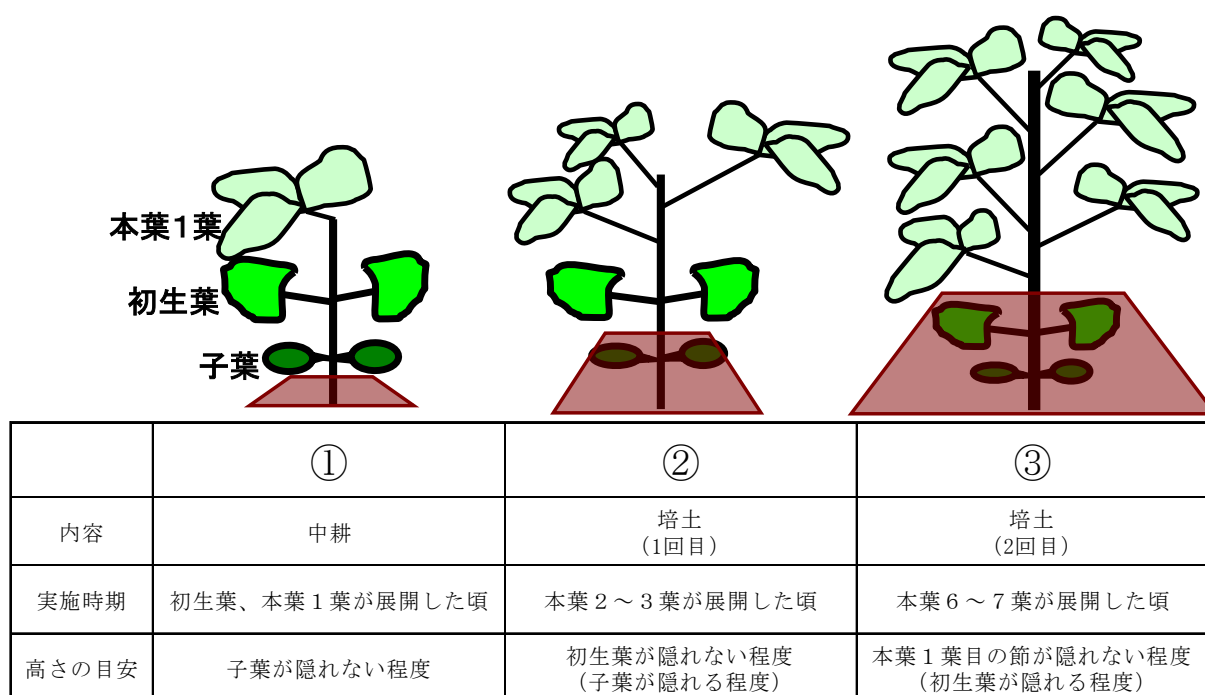


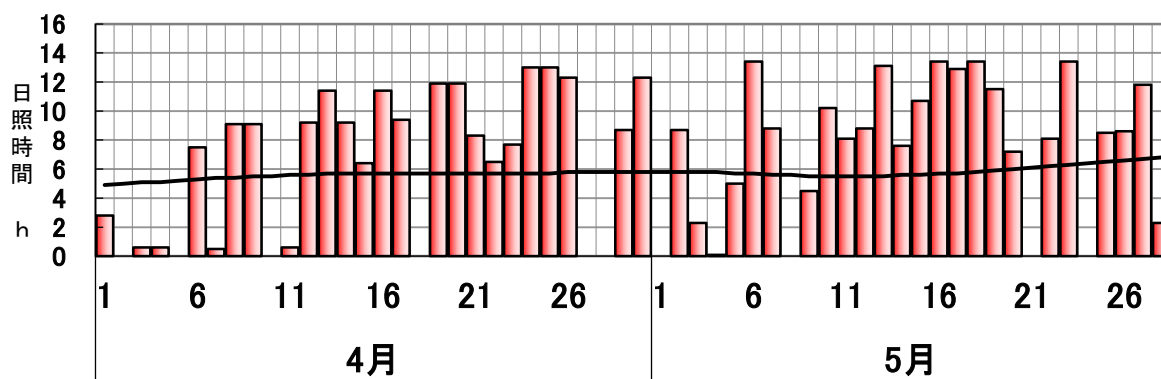
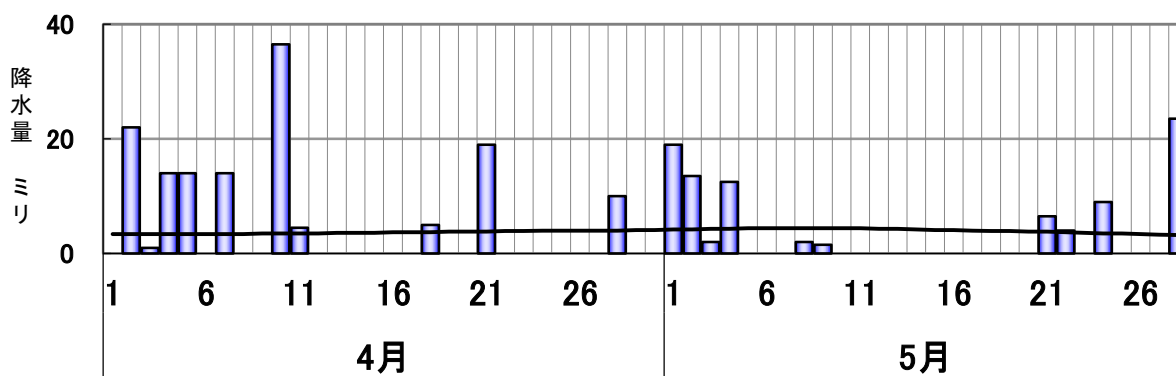
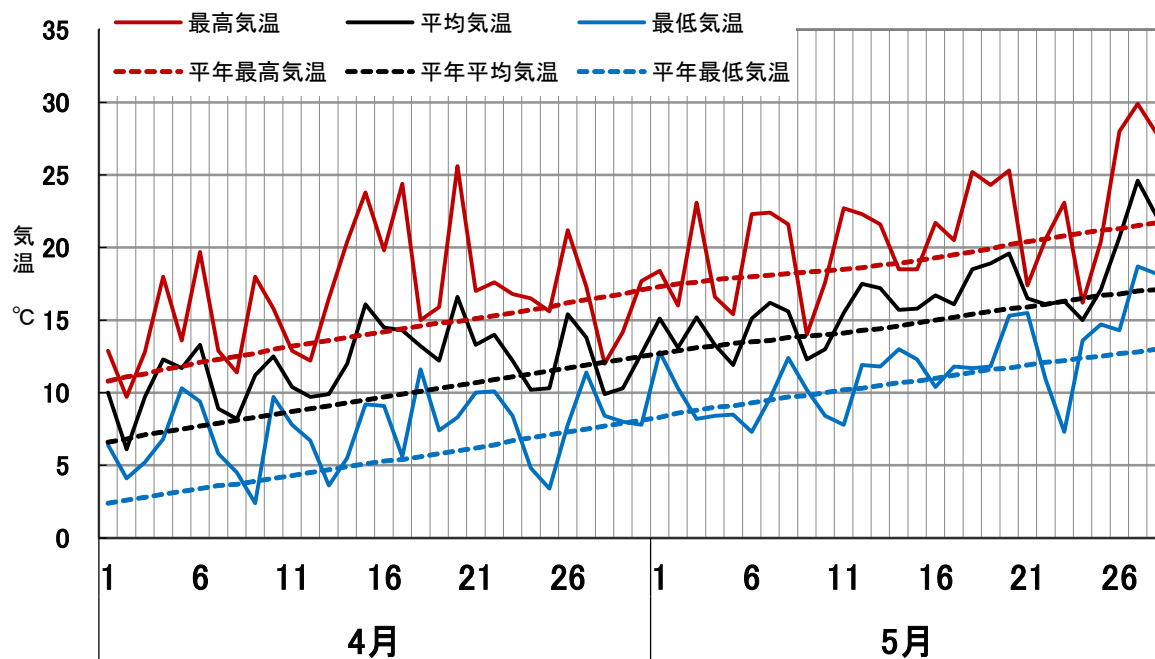
図-3 中耕・培土(1回目、2回目)位置の目安

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和8年4月1日から5月28日の気象経過図（観測地点：秋田地方气象台）

（気象庁HPより）



(2) 旬別気象概況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

項目 \ 時期	4月上旬		4月中旬		4月下旬		4月 計	
	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較
平均気温(°C)	10.4	+2.8	12.9	+3.3	10.7	+1.1	11.8	+2.2
降水量(mm)	101.5	313 %	9.5	25 %	29.0	73 %	140.0	127 %
日照時間(h)	31.7	60 %	81.9	141 %	82.4	144 %	196.0	116 %

項目 \ 時期	5月上旬		5月中旬	
	本年	平年比較	本年	平年比較
平均気温(°C)	14.1	+0.5	17.2	+2.4
降水量(mm)	50.5	113 %	0.0	0 %
日照時間(h)	53.6	93 %	107.7	194 %

(3) 各地域の気象経過

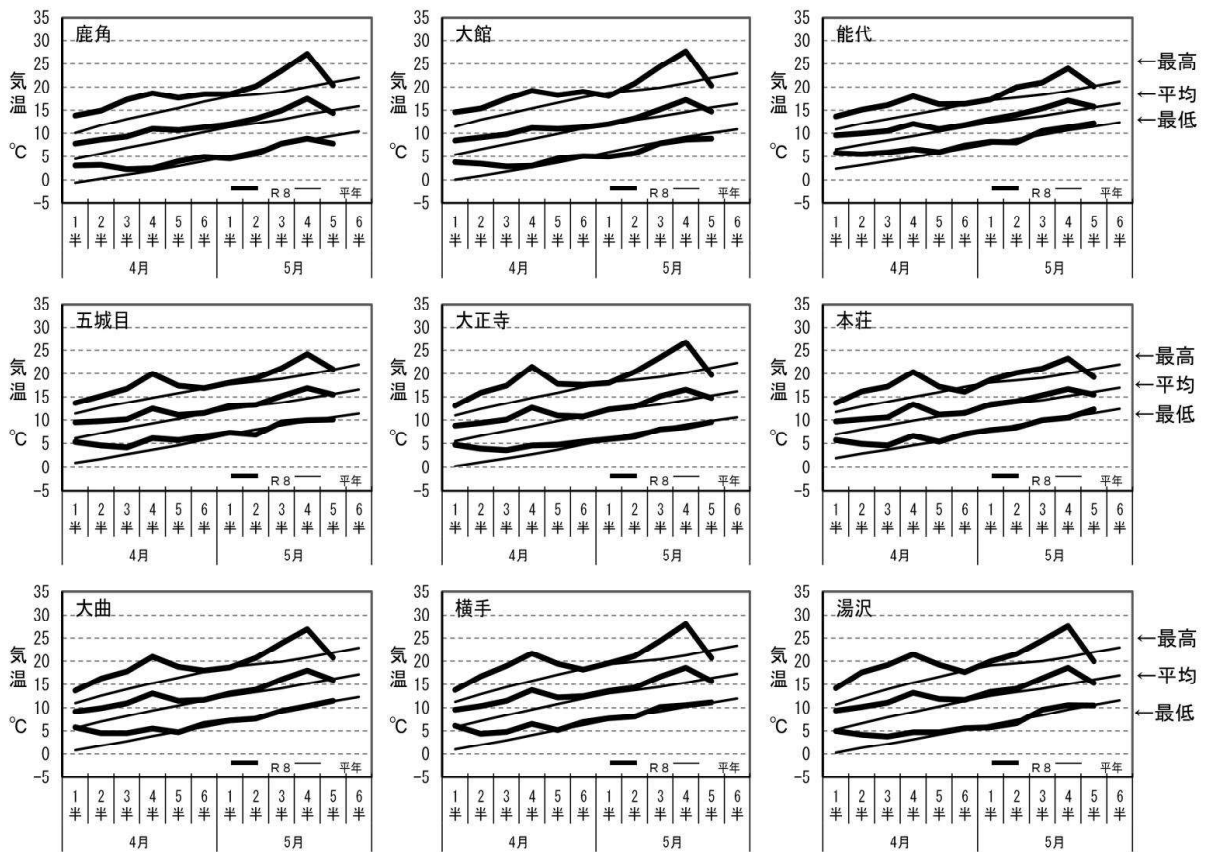


図-1 各地域の気温の推移 (半旬別、アメダス観測地点別 5月25日現在)

2 農作業の進捗状況

(各地域振興局農林部農業振興普及課調査：5月25日現在)

(1) 移植水稻の作業進捗状況

区分	地域	始期 (5%)			盛期 (50%)			終期 (95%)		
		本年	前年	平年	本年	前年	平年	本年	前年	平年
播種作業	県北	4/11	4/11	4/12	4/18	4/18	4/19	4/26	4/25	4/26
	中央	4/11	4/9	4/10	4/19	4/19	4/19	4/28	4/30	4/28
	県南	4/17	4/19	4/19	4/23	4/24	4/25	4/29	4/29	4/30
	全県	4/13	4/12	4/12	4/20	4/21	4/22	4/29	4/29	4/30
耕起作業	県北	4/21	4/27	4/22	4/30	5/3	5/2	5/7	5/10	5/9
	中央	4/15	4/22	4/15	4/26	5/1	4/26	5/7	5/15	5/8
	県南	4/26	5/1	4/29	5/3	5/6	5/6	5/11	5/15	5/13
	全県	4/17	4/25	4/18	4/30	5/5	5/2	5/10	5/15	5/12
田植作業	県北	5/13	5/16	5/14	5/20	5/24	5/22	-	5/31	5/29
	中央	5/11	5/10	5/9	5/19	5/21	5/19	-	6/1	5/30
	県南	5/16	5/17	5/17	5/23	5/25	5/24	-	6/1	5/31
	全県	5/12	5/12	5/12	5/22	5/24	5/23	-	6/1	5/31

(2) 直播水稻の作業進捗状況

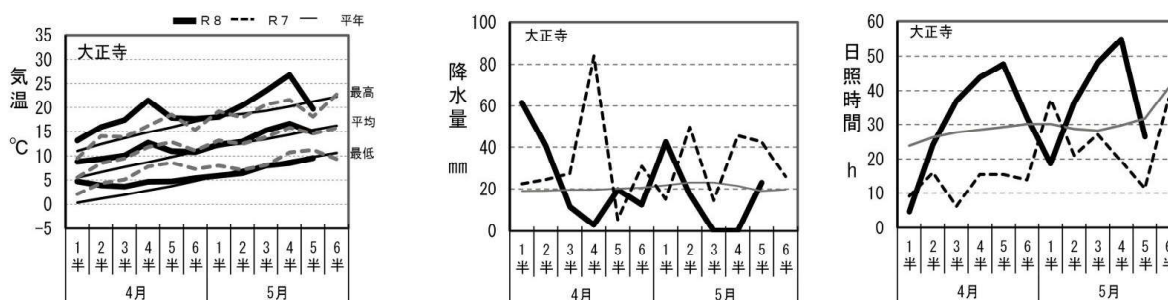
区分	地域	始期 (5%)		盛期 (50%)		終期 (95%)	
		本年	前年	本年	前年	本年	前年
直播播種	県北	4/24	5/7	5/12	5/14	5/19	5/20
	中央	4/10	4/11	5/8	5/10	5/19	5/22
	県南	5/6	5/11	5/13	5/14	5/19	5/20
	全県	-	-	5/11	5/13	5/19	5/21

3 関連成績（気象感応試験）

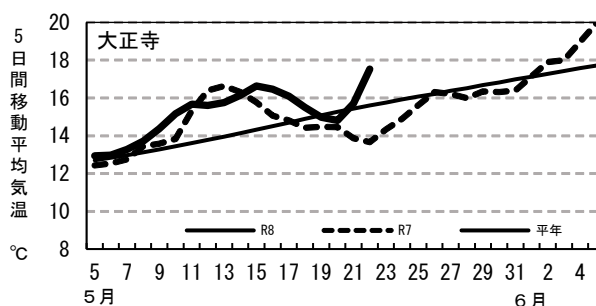
（1）農試水田ほ場の気象経過（アメダス観測地点：大正寺）

5月2半旬以降、最高気温は平年を上回り、3～4半旬はかなり高かった。また最低気温は平年並に経過し日較差は大きかった。降水量は5月10～20日まで無く、日照時間はかなり多かった。

移植日翌日から5日間の移動平均気温を5月5日以降で評価すると、5月9日に14℃を超え、以降は平年を大きく上回って経過している。



図－1 令和8年の稲作期間中の気象推移（5月25日現在、半旬別）



図－2 令和8年5月内の移植日翌日から5日間移動平均気温（5月22日までの移植）

（2）移植時の苗の生育（農業試験場内育苗 中苗、あきたこまち）

（育苗のみ）：4月3日播種、5月8日育苗終了

草丈10.7cm（平年比88%）、葉数3.4葉（平年差+0.1葉）であり、草丈は平年より短く、葉数は平年並だった。100本当たりの乾物重は2.09g（平年比99%）、充実度は1.95mg/cm（同113%）と平年を上回った。

（標準植）：4月10日播種、5月15日移植

草丈11.7cm（平年比91%）、葉数3.4葉（平年差±0.0葉）、100本当たりの乾物重は2.5g（平年比112%）、充実度は2.13mg/cm（同124%）となり、草丈は平年より短かったが、葉数は平年並、乾物重と充実度は平年を上回った。

（晩植）：4月20日播種、5月25日移植

草丈15.4cm（平年比104%）、葉数3.8葉（平年差+0.2葉）と平年を上回った。また、100本当たりの乾物重は3.02g（平年比126%）、充実度は1.96mg/cm（同121%）となり、平年を上回った。

本年は、最高気温が平年よりかなり高く、最低気温は平年並、日照時間は平年を大きく上回って経過しており、育苗施設内の日中の温度はかなり高かった。また多照で経過したことから、草丈の伸長は抑制されたと推定され、苗充実度は平年を上回った。しかし、高温による苗の消耗により、1葉の黄化が例年より早かった。

表－1 気象感応試験における苗の生育

試験区	育苗 終了日 /移植日	草 丈			葉 数			乾物重(100本当り)			充実度		
		R8	前年比	平年比	R8	前年差	平年差	R8	前年比	平年比	R8	前年比	平年比
		cm	%	%	葉	葉	葉	g	%	%	mg/cm	%	%
育苗のみ	5月8日	10.7	88	88	3.4	+0.5	+0.1	2.09	87	99	1.95	99	113
標植	5月15日	11.7	90	91	3.4	+0.2	±0.0	2.50	111	112	2.13	124	124
晩植	5月25日	15.4	127	104	3.8	+0.3	+0.2	3.02	140	126	1.96	110	121

注1)播種量:乾籾100g/箱、注2)育苗場所:農業試験場内育苗ハウス

注3)平年は、育苗のみ・標植:H12~R7の平均値、晩植:H29~R7の平均値

注4)調査個体数:100、注5)充実度:乾物重mg/草丈cm/100本

(3) せん根苗の生育状況 (移植後10日目の調査)

気象感応試験において、5月15日に農業試験場内水田へ移植したせん根苗を移植10日後に調査した結果、せん根苗1本当たりの平均発根数(A)は12.5本(平年比92%)、平均発根長(B)は6.4cm(平年比121%)、最長根長は11.5cm(平年比116%)で、(A)と(B)を乗じて求めた発根量は、平年比108%で平年を上回った。

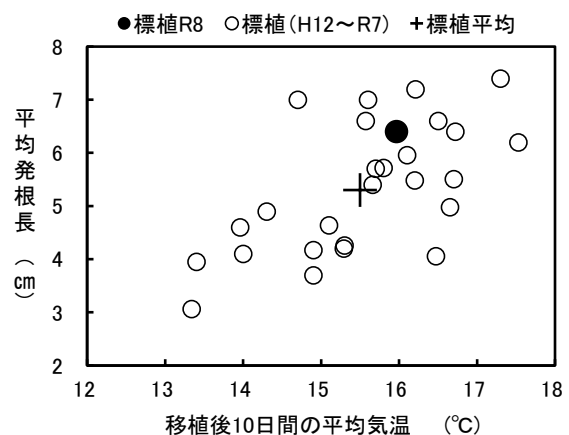
また、せん根苗30本当たりの発根乾物重は平年比137%で大きく、根重割合は平年差+9.6%と、平年を上回った。移植後10日間の平均気温は16.0℃で平年より0.5℃高く、移植苗の発根伸長は平年より良好である。

表－2 せん根苗による発根調査結果

調査項目	標植 (5月15日植)				
	年次			前年	平年
	R8	R7	平年	比・差*	比・差*
平均気温(℃)	16.0	15.3	15.5	+0.7*	+0.5*
平均発根数(本):A	12.5	11.6	13.6	108	92
平均発根長(cm):B	6.4	4.2	5.3	152	121
最長根長(cm)	11.5	8.4	9.9	137	116
発根量(本・cm):A×B	80.0	48.7	73.8	164	108
発根乾物重(g):C	0.41	0.15	0.30	273	137
地上部乾物重(g):D	1.22	1.10	1.30	111	94
根重割合(%):C/D×100	33.6	13.6	24.0	+20.0*	+9.6*

注1)標植の平年値はH12~R7の平均

注2)地上部乾物重は30個体の重さ



図－3 移植後10日間の平均気温と発根長

(4) 各地域における5日間移動平均気温の推移

各地域の主なアメダス観測地点の気温データから、移植時期別に活着の進展を推定するため、5月5日以降の日平均気温を用いて、5日間の移動平均気温を示した。

各地域とも概ね5月10日以降の移植日で14℃を超え、その後、平年をかなり上回って経過したが、5月22、24日の低温で平年並～下回った。低温は一時的な経過であり、本年は移植の好適条件が続いている。

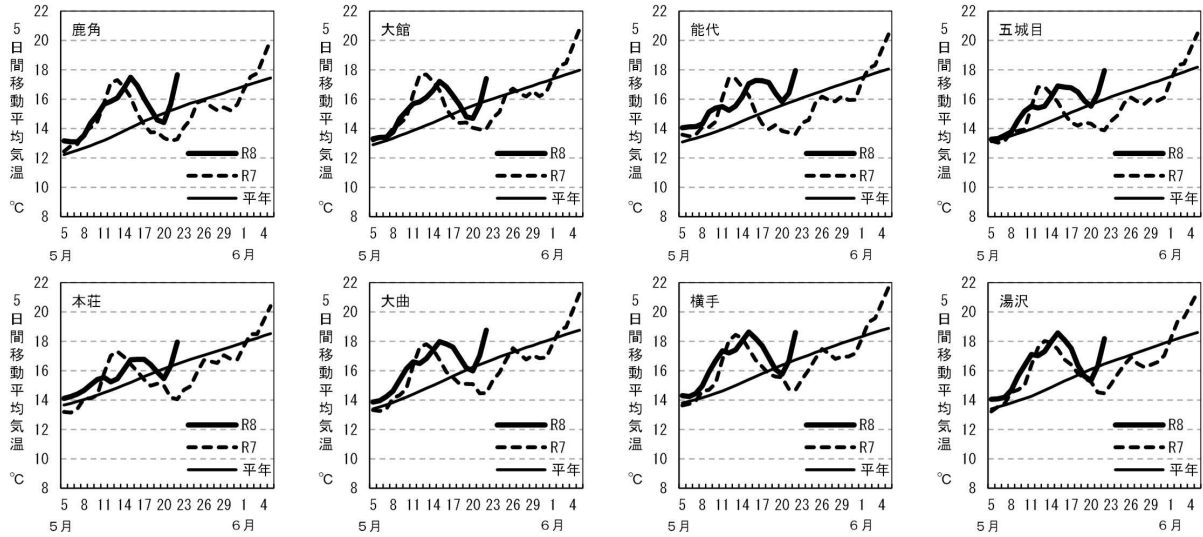


図-4 移植日翌日から5日間の移動平均気温の各地の推移

(5月27日までの観測値を使用しているため、5月5～22日までの移植日の評価)

(5) 直播作況試験（直播水稻の生理生態と気象感応試験）

1) 試験設計

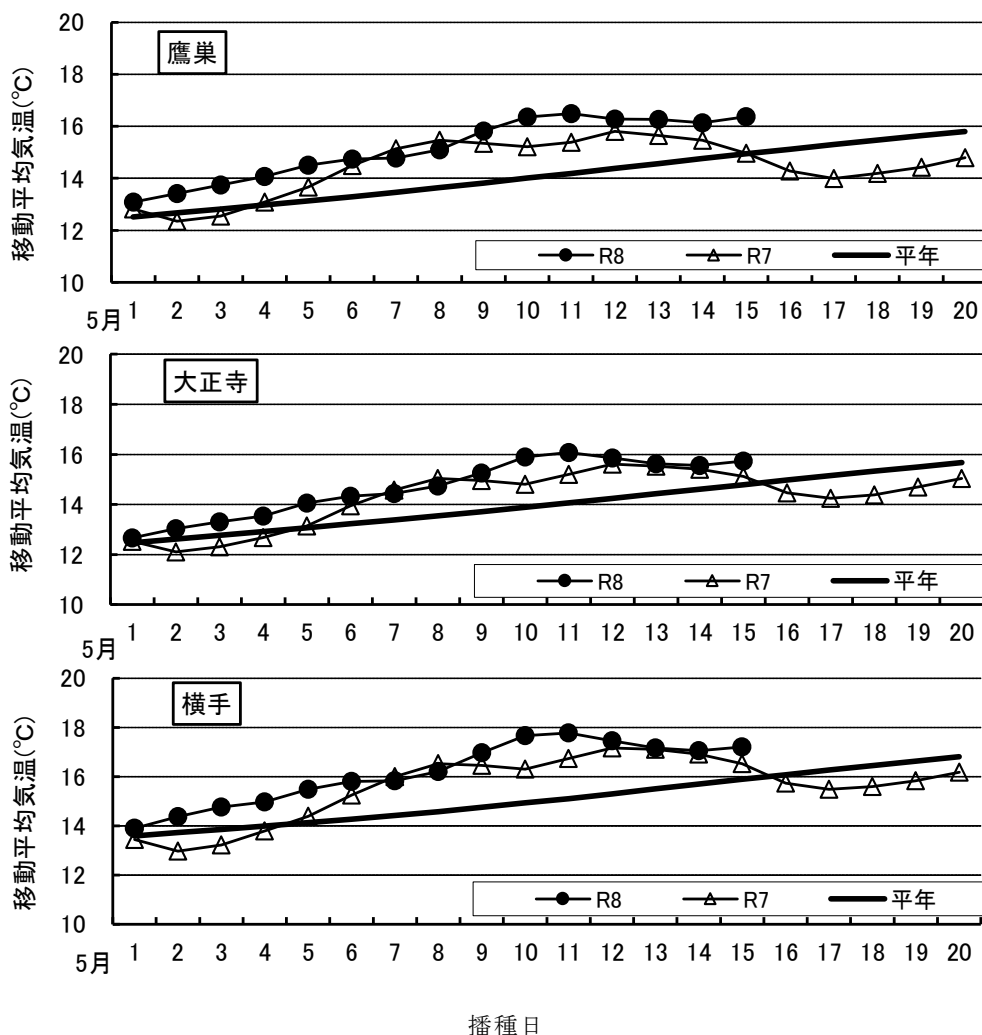
- ① 試験実施場所 農 試： 秋田市雄和相川
- ② 耕 種 概 要 供試品種： あきたこまち
- 播 種 日： 5月11日
- 播 種 量： 乾籾換算4.29kg/10a
- 乾籾重比カルパー粉衣量： 等倍量
- 播種方式： 湛水土中条播
- 基 肥： 全層施肥；N、P₂O₅、K₂O各 8 kg/10a
- (Nは速効性：緩効性= 1 : 1)
- そ の 他： 播種後落水管理、播種粒数の10%出芽を確認後に湛水管理

2) 播種後の気温推移

播種時期における気温の推移を得るため、アメダス観測地点（鷹巣、大正寺、横手）のデータを基に、5月1日以降の10日間移動平均気温を示した。（図－5）

それぞれの地点で5月1日には播種早限の12℃以上となった。

鷹巣では5月4日（平年5月10日）、大正寺では5月5日（同5月11日）、横手では5月2日（同5月4日）には播種適期の14℃以上となった。



図－5 播種翌日から10日間の移動平均気温（アメダスデータ）

3) 直播の出芽状況

本年は播種以降好天が続き、落水出芽により土壌を酸化状態に保つことが容易であったため、出芽始期は平年より早く、出芽本数も平年よりかなり多くなった。

①出芽日数

5月11日播種の農試ほ場では、播種後10日間の平均気温は16.6℃（過去10年間の平均値15.6℃）と平年より1℃高かった。出芽率10%に到達した日は5月15日で、要した日数は4日（同7.8日）と平年よりもかなり短くなった。（図-6）

②出芽本数及び出芽率

農試ほ場における5月21日（播種10日後）の出芽本数は122本/m²、播種量から換算した出芽率は77%（平年値29%）とかなり高くなった。（図-7）

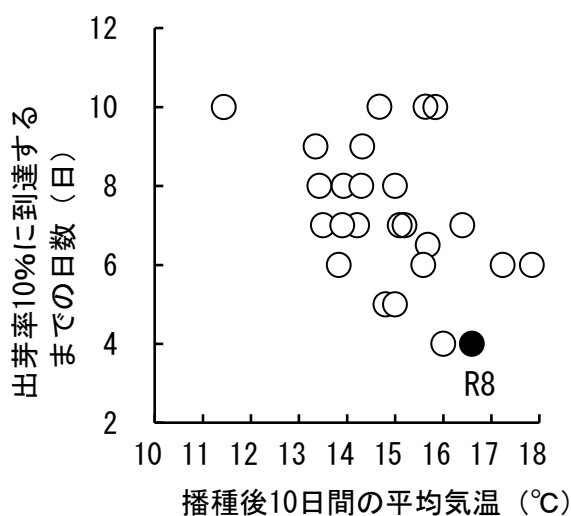


図-6 播種後10日間の平均気温と出芽率10%に到達するまでの日数の関係(H14~R8)

注) 気温は、H26及びR3、5は気象観測装置による。その他の年次はほ場に設置した温度計による。

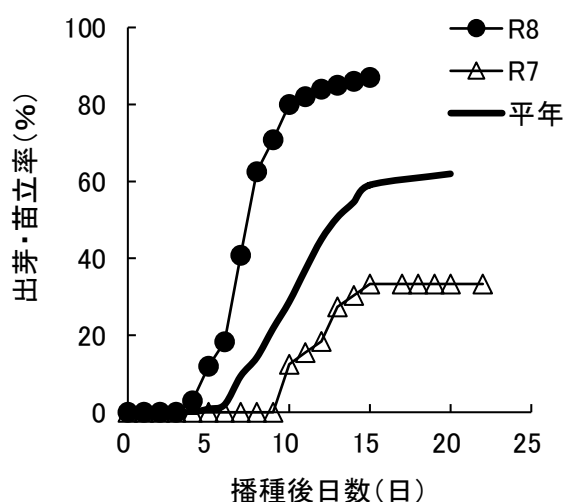


図-7 出芽・苗立率の推移

注1) 出芽・苗立率: 播種量からの推定値

注2) 平年値: 過去10年間(H28~R7)の平均値

注3) 播種月日: 5月11日

大豆ほ場への 難防除雑草の侵入に注意

近年、これまでとは異なる種類の雑草（帰化アサガオ類など）が大豆ほ場で問題となる事例が増えています。これらの雑草は、ほ場にまん延すると完全に防除することが難しいため、**初期対応が重要**です。ほ場やその周辺で疑わしい雑草をみかけた場合は、指導機関へ相談するなど、初期対応を徹底してください！

つる性の帰化雑草

- 帰化アサガオ類やアレチウリは、種子で繁殖する一年生つる性雑草。
- 発生量が多いと大豆を覆い尽くして収穫不能になるなど、甚大な被害をもたらす。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。

アレチウリ



形態・特徴

- 長さは5～8mに達する。葉はキュウリやカボチャに似る。
- 花は緑白色で、直径1cm程度、5枚の花弁からなる。
- トゲだらけの果実が塊となって結実する。
- 水系を通じて種子が移動する可能性があるため、河川が氾濫した場合等も注意が必要。

特定外来生物に指定されており、生きたまま（種子含む）他の場所へ運ぶことが原則禁止されている。

帰化アサガオ類

本県大豆ほ場では、アメリカアサガオ、マルバルコウ、マメアサガオの3種が確認されている。



大豆に絡みつくアメリカアサガオ

形態・特徴

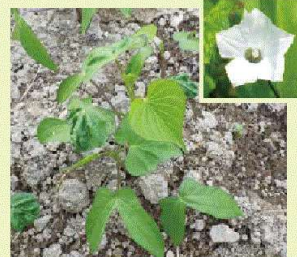
- 長さは数mに達する。花は赤～青色と様々で、直径3cm程度のロータイプ、上から見るとほぼ円形である。帰化アサガオ類では県内で最も多くみられる。
- 葉が分裂しないマルバアメリカアサガオは、アメリカアサガオの変種である。



マルバルコウ

形態・特徴

- 長さは3～4mに達する。
- 角があるハート型の葉が特徴。
- 花は朱赤色で、直径1.5～2cm程度の五角形ロータイプである。



マメアサガオ

形態・特徴

- 長さは数mに達する。葉縁は紫色を帯びることが多い。
- 花は白色、まれにピンク色で、直径1.5cm程度である。

イヌホオズキ

- 種子で繁殖する一年生雑草。果実を含めて全草に毒がある有毒植物である。
- 主な被害は、減収や果実などによる汚損粒の発生である。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。



イヌホオズキの幼植物(左)と果実(右)



形態・特徴

- 基部からよく分枝し、高さは50～90cmに達する。
- 葉は先のとがった卵形で、縁に不揃いの鋸歯（ざざざ）がある。
- 花は白色で5裂し、直径1cm程度である。
- 果実は球形で直径7～10mm。未熟果は緑色であり、熟すと黒色になる。

作成：秋田県植物防疫協会 編集：秋田県農林水産部（平成30年2月作成）

マルバルコウの写真(左側)は、秋田県立大学名誉教授 森田弘彦氏 提供

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

OSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・秋田県内の水稻の生育状況
- ・水稻および大豆の技術情報
- ・異常気象対策
- ・その他、秋田米に関する情報



こちらのQRコードから登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部

生産環境部

TEL 018-881-3330

内線(422・423・424)

内線(306・310)

秋田県病虫害防除所

TEL 018-881-3660

秋田地方气象台

TEL 018-864-3955

東北農政局秋田県拠点

TEL 018-895-7303

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

TEL 018-860-1786

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は6月15日（月）の予定です】